

# 今の世の中本音が見えていくか!

テレビドラマで今、断然視聴率が高い山田太一作品「岸辺のアルバム」ふぞろいの林檎たち」「終りに見た街」…。複雑な現代社会にあって、誰もが心ひかれ

るドラマの視点は何か。今回は作家・シナリオライター山田太一氏に迫ります。

インタビューは作曲家・大西進氏。

大西進氏。



大西 初めまして。印象に残るテレビドラマで目を止める山田太一作品が多く、ぜひ一度お話を伺ってみたいと思

っていました。作家になられる前は松竹で木下恵介監督について助監督をしておられたんですね、木下恵介監督にもこの欄に登

場していただいたことあるんです。山田 そうでしたか。大西 山田さんの作、いろいろありますが、一番新しい所では昨年春に放送された「札文島」ですが、現代社会の持つさまざまな問題が凝縮

されてた気がしますが、あそこには、

人間のどこに光をあてるか

山田 札文島にはあまり予備知識はなかったんですが、北の島の島だから、なにかあるだろうとディレクターと二人で出かけていったんです。一昨年のクリスマス頃でした。ものすごい吹雪でした。四日くらい島にいて取材していくと、必ずしも離島だけの問題ではなく、東京のどこにもある問題がここにも渦まいていて、と思ったんです。例えば、教育の問題ももう

小学校の頃から心配しているし、仕事の跡継ぎの問題等々、今自分のいる所より他の方がなにかいじることがあるんじゃないか、という、現状にもの足りなさを感じる、逆に今いる所を愛するとういう動きもある。どちらかというのではなく、両方存在を指し示すというふうにならばいいと思います。大西 山田さんの作品を見ていると、現実からの出発というか、現状をのりこえて新

たに動きだせるようなそんな印象を受けるんですが。

山田 本当はライターがあまりそういうことをしない方がいいんじゃないか、でも、なんかリアリズムという、登場人物がみんなエゴイストだったり、物欲のかたまりだったり、非常にわかりやすい欲望を持っているというふうになりがちなのですが、本当の人間は、エゴや物欲だけではありませんよね。理想を持ってそのための死んでもいいって思っている人間だっていて、現実からの出発というか、現状をのりこえて新

たに動きだせるようなそんな印象を受けるんですが。山田 本当はライターがあまりそういうことをしない方がいいんじゃないか、でも、なんかリアリズムという、登場人物がみんなエゴイストだったり、物欲のかたまりだったり、非常にわかりやすい欲望を持っているというふうになりがちなのですが、本当の人間は、エゴや物欲だけではありませんよね。理想を持ってそのための死んでもいいって思っている人間だっていて、現実からの出発というか、現状をのりこえて新

あてるか、というところ書いているところがそんな印象を持っているんじゃないか。現実に対応していかなくては、自分の生の主役になる、というような生き方を

する人を書きたいとは思っていませんが、ただことは言ってしまうとどうもね。(笑)

大西 このインタビューは「本音インタビュー」というタイトルですが、本音をさらけ出すことがかえって今の社会では人間関係をきつくしてしまおう、そんなことありませんか。

「たてまえ」に無批評

山田 さあどうでしょう。本音は何であるのか、実は自分でもよくわかっていない人が多いんじゃないか、と僕なんか思っているんですが。流行に影響されて、こういう人間になりたいと思っても、もっと底の深い自我はそんなこと望んでいなかったり、しかし、そういう深い自我をみつめる余裕がないために、目先の流行にうはわられて生きているというのではないのでしょうか。

また、多くの弱者は本音だけでは生きていけないよ。とついつい、この部分を持って生きていくわけで、僕はそれを少しも悪いことだと思いません。もちろん、虚ばかりでは、生きての喜びも活力も湧いてきませんが。もっとも、このころはたてまえで言われていることに対して、あまり批評できなくなっているという気がします。例えば、ビートたけしの暴力事件にしても、ともあれ暴力はいけない、というふうな身もふたもないようなことがでてることも少なく、個人的に感じていたところは全部抑圧してしまっ、スーと熱がさめていってしまう。相手の方があれだけのことをすれば暴力をふるってしまふことだってあるなあ、初めは笑って見ていたのに、警察が出てくると、もう警察の判断待ちですからね。

また、多くの弱者は本音だけでは生きていけないよ。とついつい、この部分を持って生きていくわけで、僕はそれを少しも悪いことだと思いません。もちろん、虚ばかりでは、生きての喜びも活力も湧いてきませんが。もっとも、このころはたてまえで言われていることに対して、あまり批評できなくなっているという気がします。例えば、ビートたけしの暴力事件にしても、ともあれ暴力はいけない、というふうな身もふたもないようなことがでてることも少なく、個人的に感じていたところは全部抑圧してしまっ、スーと熱がさめていってしまう。相手の方があれだけのことをすれば暴力をふるってしまふことだってあるなあ、初めは笑って見ていたのに、警察が出てくると、もう警察の判断待ちですからね。

学校の先生でも、なぐった奴はどつちだ、じゃあお前が悪いみたいな、細かな人間の現実がないがしろにされているというか、これは自信がないからだとも思うんです。リアルに生きていない気がするんです。こういうのって悪い気がします。例えば、隣の家族はとってもいい人だと思ってる。でも、ユダヤ人だと分る。すると、いい人だと思ってる自分の感情は抑圧して、ナチス政府の意向に従ってしまうというふうな。世論はどうかとか、みんなの顔色ばかり見ている。自分の内的なものを重んずることをやめていってしまう

山田 ええ、学校の教師になろうと思っただけなら、松竹にいた時代から木下先生にすめられていくつか書いてまして、よし、これで食べるって思っただけでフリーになっただけで悲憤な決意というのはないか、松竹を辞めたんですが、なんか自分の最初の目標をまっとうしなかったというふうな気分になった。妙なものです。

大西 映画とテレビってちがうと思うんですが、作家の方としてはどんな違いを感じられてますか。

山田 テレビの仕事は、抽象論にはなりにくいメディアです。とくに日常生活を描く場合はそうですね。日常使うことばの範囲が描くことが必要で、自分だからどうするんだらうというところからいつも見ていかないといいかと思っただけです。例えば、豊田商事の社長が殺された事件がありましたねあの時、その場に居合わせ取材した人に対して、なぜ人間に戻って殺人を止めなかつたのか、という意見と、いやあ、ジャーナリストとして見るということに徹しなければいけないんだという意見がありました。僕は両方ともちっともリアルじゃないと思っただけです。

山田 テレビの仕事は、抽象論にはなりにくいメディアです。とくに日常生活を描く場合はそうですね。日常使うことばの範囲が描くことが必要で、自分だからどうするんだらうというところからいつも見ていかないといいかと思っただけです。例えば、豊田商事の社長が殺された事件がありましたねあの時、その場に居合わせ取材した人に対して、なぜ人間に戻って殺人を止めなかつたのか、という意見と、いやあ、ジャーナリストとして見るということに徹しなければいけないんだという意見がありました。僕は両方ともちっともリアルじゃないと思っただけです。

山田 二十余年、ものを書きついでてくれた目です。最初はライター志望というわけではなかったか。山田 ええ、学校の教師になろうと思っただけなら、松竹にいた時代から木下先生にすめられていくつか書いてまして、よし、これで食べるって思っただけでフリーになっただけで悲憤な決意というのはないか、松竹を辞めたんですが、なんか自分の最初の目標をまっとうしなかったというふうな気分になった。妙なものです。

作家 **山田太一氏**

山田太一へまだたいく昭和九年、東京生まれ。早稲田大学教育学部卒。松竹撮影所の助監督を七年間勤め、以後シナリオライターとなる。

作品に「ふぞろいの林檎たち」「シヤツの店」などのテレビ。「リリ」「シヤン」「シヤン」などの舞台。「他の夢をいらい見なご」他の小説。エッセイ集など。

“自分の生に主役になる、そんな人間描きたい”

山田 二十余年、ものを書きついでてくれた目です。最初はライター志望というわけではなかったか。山田 ええ、学校の教師になろうと思っただけなら、松竹にいた時代から木下先生にすめられていくつか書いてまして、よし、これで食べるって思っただけでフリーになっただけで悲憤な決意というのはないか、松竹を辞めたんですが、なんか自分の最初の目標をまっとうしなかったというふうな気分になった。妙なものです。

大西 映画とテレビってちがうと思うんですが、作家の方としてはどんな違いを感じられてますか。

山田 テレビの仕事は、抽象論にはなりにくいメディアです。とくに日常生活を描く場合はそうですね。日常使うことばの範囲が描くことが必要で、自分だからどうするんだらうというところからいつも見ていかないといいかと思っただけです。例えば、豊田商事の社長が殺された事件がありましたねあの時、その場に居合わせ取材した人に対して、なぜ人間に戻って殺人を止めなかつたのか、という意見と、いやあ、ジャーナリストとして見るということに徹しなければいけないんだという意見がありました。僕は両方ともちっともリアルじゃないと思っただけです。

あ、あの狭い通路で、日本刀を持った男が現われたら、仮にジャーナリストの立場をなくして人間に戻って殺されても止めにんかはいれない。撮影したカメラマンだっ

# 若者の明るき志向に潜む弱さ

## 大西進の ほんま本音がピエ

(4面からのつづき)

てジャーナリストに徹したなんてもんじゃいような気がする。

山田 そういふ現実にどうもつとつかないような感じがけんな中にいたのかかわらう議論の場になると、急に人間に戻るべきかジャーナリストに徹すべきかなんていうふうになってしまふ。

自分がその場にいたら、という生き生きとした想像力を持たない。ほんとは最初みんなそう思ったはずなんです。しかし、時間が少し経って正論がとびだして来るよりリアルじゃなくなっていくという感じがします。

NHKの紅白歌合戦の北島三郎の例もそうですよ。その場その場ではあかとも適切な判断のように見えますが、その

送の新人コンテストに優勝して以来、正統派カンツォーネを代表する存在となった。スリムな容姿、美形の顔、ドラマチックで、より艶な歌声を越えてしまった。ギンギンとして豊かな声量――それを代表する作曲家、ミキスレ由に、「ゴローの牝豹」で、これぞ「自由の女豹」などとも呼ばれてきた。かのエディット・ピアフが、その歌唱力を激賞したとも言われている。一九三九年生まれ。本名は



## 本音ミュージック あれこれ

### 自由をうたう女豹 ミルバ

ミルバが十年ぶりに来日す。イルバ・マリア・ピオルカテ。五九年にイタリア国営放送の新人コンテストに優勝して以来、正統派カンツォーネを代表する存在となった。スリムな容姿、美形の顔、ドラマチックで、より艶な歌声を越えてしまった。ギンギンとして豊かな声量――それを代表する作曲家、ミキスレ由に、「ゴローの牝豹」で、これぞ「自由の女豹」などとも呼ばれてきた。かのエディット・ピアフが、その歌唱力を激賞したとも言われている。一九三九年生まれ。本名は

もうリアルではないことを感

れると、自分の判断に自信がもてなくなってしまう人が増えると思えますね。

山田 その視点からいくと、今の子どもをとりまく状況、とくに教育問題なんかはどんなふうに見られてますか?

山田 きついののは成績の価値観が非常に力をふるって、それで人格まで計られると、それが問題です。昔は悪い子ほどかわいいと親は言ったものですが、この頃は、悪い子は憎らしくなってしまう。ネガティブなものに

対するセンスが非常に悪くなっただけという感じがしますね。

暗さを見られる心  
大西 そういう中で、子ども、

あはれられている。この「自由をうたう女豹」の評価を得ているという。イタリアのレジスタンスによる解放三周年を記念して「自由のために」というLPも出した(75年)。

自由――ミルバが、この問題にこころを感するのは、彼女が反ファシズム、レジスタンスの最も活発な地方(私は見ていないが、映画『一九〇〇年』の舞台)の出身だったことによる、と聞く。

もも大人になっていく過程で

あたりさわりのない生き方をしている。青年の無関心層が多くなるという傾向は、そんな土壌からあるような気がしますね。

山田 ええ、今は青年が多量にだらだらして動かない。だから、青年の中にも無力感があると思つて、無気力な状態になってしまう。大人の方も青年の動きに敬意を表したり、おびえたりしたものがある。逆に抑えてしまふ。将来の見通しも非常に不確かだ。狭い人生になっていく。今の青年はかわいそうに気がしますが、この頃の若者が好きですね。

暗さを見られる心  
大西 そういう中で、子ども、

あはれられている。この「自由をうたう女豹」の評価を得ているという。イタリアのレジスタンスによる解放三周年を記念して「自由のために」というLPも出した(75年)。

自由――ミルバが、この問題にこころを感するのは、彼女が反ファシズム、レジスタンスの最も活発な地方(私は見ていないが、映画『一九〇〇年』の舞台)の出身だったことによる、と聞く。

性格もねじくれたものはきらい。明るさはかりを神経症に好きになっているという感じがしますね。

山田 やほり、テレビが多

本気に生きること余裕のある人は暗い部分もちゃんとフォルムを与えて見る、味わうことが出来る。しかし、余裕がないと、例えば自分が痛むんじゃないかと不安をいだくともつとその字を見るのも、患者者に触れるのも恐れるっていうことあります。

山田 テレビドラマの現況が端的に示していますね。明るさの感じが、ガラガラと笑つものが、めんどろへさきものはいや、とにかく現

山田 テレビは割に未成熟なメディアで、身上相談的なものも割に見て下される。小説で今、いかに生きるべきかといったテーマは読まれないと思つてます。もっとひねらなると、ひねったものというのにはテレビでは受けられないですね。これはお客さんの方で見分けてますね。

山田 ええ、テレビは割に未成熟なメディアで、身上相談的なものも割に見て下される。小説で今、いかに生きるべきかといったテーマは読まれないと思つてます。もっとひねらなると、ひねったものというのにはテレビでは受けられないですね。これはお客さんの方で見分けてますね。

山田 やほり、テレビが多

山田 やほり、テレビが多

山田 やほり、テレビが多

山田 やほり、テレビが多

山田 やほり、テレビが多

山田 やほり、テレビが多

山田 やほり、テレビが多



▲この日、文化祭での発表の資料にしたい、と高校生からのインタビューを受けた山田氏(手前)、その後、本紙のインタビューに、大西氏(右)と

っへり返るんだっていくら教

えても、子どもは、そんなこと言つたって国が今一生懸命戦っている時に戦わないのは非国民だと言つて、子どもの方が軍国主義に適應してゆくと、話なんです。

現代の人間が直接軍国主義を体験して言うふうにはないし、いろいろ不自由が浮かびあがつてないんです。昔話だとなんて、苦勞して書きました。戦争体験を語りつけないわけはないんですが、難しいですね。

わかつてもらう  
ための手続

大西 人をひきこむ作品づくりのポイントって、山田さんはどうおぼえてますか。

山田 劇場でしても何にしても、時間とお金をやりくりして来て下さい。一つは見る人の身になって創ることだと思います。つまり、その人たちがどうしたら、自分たちの一生、ひとつのストーリーをおもひやりと思つてくれるかどうかが一生懸命、想像することですね。ひとつは、わかつてもらうための手続きを踏むことだと思います。僕もそのことに日々苦しんでいるので、とても上からものを言う立場ではないですが……。

大西 最後に今ほとんどなものを手がけておられます。山田 中年になるとどうしてか友だちをひいていく、そうするといつても閉鎖的になってきます。夫婦だけという枠でしか生活の範囲を考えられなくなる。そうではなく、中年の友情のとりえ方、それを男女で描いてみたんですが、「友だち」というんです。(NHKで放映)大西 それは楽しみにしています。これからも活躍、期待しています。